

今回のテーマは「新たな形で」

文豪とイラストレーターがコラボすることで、近代文学の名作が新たな作品として生まれ変わりました。それが、今回紹介する乙女の本棚シリーズ(立東舎)です。近代文学は堅苦しいイメージがありますが、このシリーズは、ストーリーの雰囲気に合わせてデザインされた挿絵や文字の色などが読み手を楽しませてくれます。こちらの作品を読んだことがある方は、かつて頭の中に思い描いた映像と美しい挿絵とを比較してみるのも面白いですよ。



春は馬車に乗って

横光 利一／著 とう あつき／絵

皆さんは春が来たことを何で感じますか？暖かい日差し、色とりどりの花々、鳥のさえずり。まだ寒さが残る中、それはホッと心が明るくなる瞬間ではないでしょうか？

このお話の季節も冬から春に変わっていきます。主人公の男は、妻の看病をしていました。妻は肺の病気です。病状は日に日に悪化していきます。男は、妻が食べたいものを買ってきたり、汗を拭いたりと献身的に看病します。しかし、時にすれ違いから言い争いをしてしまいます。看病の苦痛に追い詰められていく男の様はつらいものです。そんな暗く悲しい空気の中、二人の元へ「春」がやってきます。そして、すれ違っていた二人を優しく温かく包み込みます。春の訪れは幸せな時間も運んでくれたのです。



桜の森の満開の下

坂口 安吾／著 しきみ／絵

鈴鹿峠に一人の山賊の男が住み始めました。この男は女をさらったり、人を殺めたりと残忍な男でした。ある日男は、美しい女をさらってきます。魂が吸い寄せられるほど美しいこの女の願いを、男は次々叶えていきます。たとえ

それが、人の首を集めることだとしても。そして女によって、男の心も生活も変わっていくのです。

残酷な描写もあるため、苦手な方は注意が必要かもしれません。残忍な男と美しくも恐ろしい女。非道の二人はどこに行き着くのでしょうか。満開の桜のように、妖しくも儂いお話です。